小川一乗著

『空性思想の研究—入中論の解読—』

瓜生津　隆　真

チャンドラキールティ Candrakīrti（月称、七世紀頃）の主著「入中論」Madhyamakāvatāra（頌と疏）は、中観佛教の思想体系を理解する上できわめて重要な書物であるばかりでなく、インド大乗佛教やチベット佛教の思想史研究からいっても注目すべき著作である。本書はその「入中論」第六章の解読研究である。第六章は「入中論」の中心をなすものであり、分量からいっても全体の三分の二を占めている。本書はその解読にあたってジャヤーナンダ Jayānanda（カシュミールの学僧、十一～二世紀頃）とツォンカパ Tsoṅ kha pa（宗喀巴、一三五七～一四一九）との注釈を参考し、これに基づいて解読研究を行なっているのであって、ここに本書の特色があるとともに、著者の長年にわたるすぐれた研究成果がみられる。

このように「入中論」第六章の解読研究である本書に、「空性思想の研究」という書題をつけたことについては、ツォンカパの注釈によったと著者はのべる。このことによっても知られるように、本書は「入中論」第六章のたんなる和訳およびその注記を試みたのではなく、「入中論」の内容を二注釈に基づいて可能な限り厳密に検討し、理解しようと努めたもので、とくにツォンカパの解釈や思想をとりあげ、その紹介をしている。

「入中論」研究については、今世紀初、Louis de la Vallée Poussin によってチベット訳テクストが刊行され、それと併行してフランス語訳（第六章の中端で中断）が発表されてから、学界において注目されるようになり、諸学者によって訳注や研究がこころみられてその成果もある程度発表されている。しかし「入中論」のテクストとしてはチベット訳しか現存しないために、文献研究が容易でなく、したがって解読がきわめて困難であること、さらにその内容がインド大乗佛教の中観・唯識などの諸学派の思想や当時のインド哲学の諸思想をとりあげて、きわめて難解な論議を展開しているため、その諸思想の論争の要点を理解していくことが容易でないことなどの理由から、「入中論」の全体にわたる解読研究はまだ完了していない。著者はかねてからこの解読研究をすすめ、次々とその成果を学会誌に発表されてきたが、本書のような研究成果がまとめて発表されるにいたったことは、学界にとってまことに喜ばしいことである。以下、本書を概観して気付いた二、三の点について私見をのべ、本書についての詳細な書評は後日を期したいと思う。

まずはじめに、テクストおよび翻訳に関する文献については、序論（六頁注1）において記されているが、次の中国語訳の二書を追加することができる。

○法尊訳「入中論」六巻（中華民国三十一年、成都・漢蔵教理院。再刊本、同六十四年、台北・新文豊出版公司）。

○法尊訳「入中論善顕密意疏」十四巻（中華民国三十一年、成都・漢蔵教理院）。

前者は「入中論」の頌と疏との中国語訳であって、この中の頌の部分を取り出して論述した研究が、釈演培「入中論頌講記」である。後者はツォンカパの注釈の中国語訳であって、筆者はかつて米国ウィスコンシン大学の図書館でこれをたまたま見つけることができた。しかし残念なことに第四巻までしかなかった。ところが、幸いにもこの訳書には序につづいて入中論大疏科文（＝ツォンカパによる科文）が載っていた。それによって入中論の梗概をおおよそ知ることができたのである。

ところで、「入中論」の文献研究に関して筆者がかねて考えていることは、チベット訳テクストについて可能な限り厳密な校訂をすることである。先述のテクスト刊本があるけれども、笠松単伝氏が「入中観論疏訳注(1)」（佛教研究四の三）にすでに指摘しているように、これは充分な校訂テクストとはいえない。テクスト校訂には、ナルタン、デルゲ、北京の諸版の照合は勿論のこと、「入中論」の頌（二本）と疏（一本）の校合、さらに、諸著作における「入中論」の引用、「入中論」における諸経論の引用などの検出等、文献研究の基礎的作業が必要である。それとともにチベット訳テクスト一般についていえることであるが、用語や語句についてのサンスクリット語をできるだけ正確に還元し、チベット訳の原典における原意を容易にたどることができるような基礎作業も必要である。この点に関しては同一作者および同一訳者になり、幸いなことにサンスクリット原典とチベット訳が現存する、「中論疏」があって、その訳語例や語句表現が大へん参考になる。また著者が用いた二注釈がテクスト校訂にも大いに役立つ。ことにジャヤーナンダの注釈は逐語的であるから、これを看過することはできない。

このようなテクスト校訂についての基礎的作業は、いうまでもなく多くの時間と労苦とを要する。しかし文献研究にとっては不可欠の仕事である。本書は解読を中心としているため、テクスト校訂に関しては必要最少限を脚注に示しているにすぎないが、著者が決して文献研究の基本線をおろそかにしていないことは一見してうかがい知ることができる。しかし「入中論」のような大乗佛教思想の基本的著作には、解読に先立って、たとえば Louis de la Vallée Poussin が校訂出版した「中論疏」のサンスクリット原典のような模範的なテクスト校訂が必要であると、筆者は考えているのである。

次に解読研究にあたって著者が試みた方法について一言したい。まず著者は、「入中論本文を二注釈書の注釈文を補足文として依用しつつ解説するという方法が取られたのである」と基本方針をのべている。このような方法を取ったことについて「入中論本文と二注釈書との三原典の全文を並列的に示していくという最もオーソドックスな方法が用いられるべきであったのであろうが、しかしながらその方法を取ると本書の三倍ほどの分量となるためにやむなく」この方法を取ったとことわっている。このように「入中論」の本文と二注釈書の注釈を適宜補足しながら解読したのは、「入中論」本文をできるだけ正確に

理解し、意味を明確にするためであった。

ところで解読研究のために依用された二注釈書について、序説（八～一〇頁）に簡にして要をえた紹介がある。ジャヤーナンダが忠実な逐語的注釈を行なっていることは、著者の指摘するとおりであって、したがって補足文のほとんどはこの注釈書によっている。ジャヤーナンダはカシュミール出身のすぐれた学僧として知られ、チベットの中観学者として著名な Rma bya byaṅ chub brtson ḥgrus は彼の許で学んだと伝える（Blue Annals I, p. 334）。ところでこのチベットの学僧は十二世紀前半に没したと考えられるので、ジャヤーナンダは十一世紀後半から十二世紀初にかけて活躍したのではないかと思われる。ツォンカパの「ラムリム」を見ると、ジャヤーナンダの注釈が三ケ所引用されているが、そのうち二回は中観派の正統説を逸脱しているものとして取り上げている。ジャヤーナンダは後期中観派の流れに属し、しかも彼自身の理解や独自の思想的立場をもっていたことが注釈書の中から推測されるが、ツォンカパはその理解に対して批判をしているのである。このようにこの注釈書においてジャヤーナンダの思想がところどころに示されているのである。

ツォンカパの注釈書については、「Jayānanda の注釈書を充分に参照した上で書かれたものであることが知られる」（一〇頁）といい、したがってジャヤーナンダが詳細に注釈しているところは簡略化または省略され、ジャヤーナンダの注釈がないところを注意して注釈したり、あるいはジャヤーナンダと見解を異にしたところを意識的に強調していると指摘する。そこでこの注釈書は「Tsoṅ kha pa の学的個性が発揮されている個処が多い」（一〇頁）とみている。本論の研究は、この随所に出ているツォンカパの学説を紹介したものであって、著者が指摘するように、なかでもスヴァータントリカ（自立論証派）とプラーサンギカ（帰謬論証派）という中観両学派の教義上の相違を論ずる個処（三五頁以下）や勝義と世俗との二諦についての解釈（八二頁以下）などは注目すべき見解である。

本論の目次はツォンカパの科文によって立てられている。この科文は細目次として載録され表にまとめられている。このように詳細に内容を分析して科文を立て、本文を解説し論述していくのが、チベットの注釈文献の特色であって、ツォンカパの注釈書もその例にもれない。ところでこの科文のチベット文を著者は忠実に和訳して、そのまま目次に用いようとしているが、意味がはっきりしないところがあって、一考を要する。たとえば、総目次の本論第三は「甚深なる縁起を見る真実性を解釈する」とあるが、これでは意味が不明確であって、そのまま目次として用いるのは適当でないであろう。ここのチベット文は「（菩薩が）深甚なる縁起と見給う真実を説く」というように読めるから、目次としては、第三「甚深なる縁起である真実を説く」というようにでもすればどうであろうか。ちなみに、第三第一章は「甚深なる縁起を説くことを宗とする」、同第二章は「甚深なる縁起の意味を説く〔に適わしい〕器と認められるもの」というようにしたらどうであろうか。また、著者は細目次

において、本論三五頁から四五頁までを「序・ツォンカパによる序説」として第五章第二節のはじめに収める文として見ているが、これは第五章第一節2「真実智の対治分を標挙する」の内容としてみるべきであろう。法尊は「明了知真実之障」と訳し、その内容を二つに分け「自続中観派の実執を明かす」と「応成中観派の実執を明かす」とする。自続中観派とはSvātantrika応成中観派とはPrāsaṅgikaのことである。その他、細目次―ツォンカパの科文において誤訳と思われるものを二、三あげると、第五章第二節⑫と⒀との間の「2他生を区別して否定する」とある中の「区別して」は「別して」となおすべきであり、同㉔の「4寂滅を世間が侵害することにおける反証が説かれる」は「遮遣に対して世間が反証するその反証を説く」と訳したらどうであろうか。また同㉝の「否定が自性をもって無なるアーラヤ〔識〕を認めない理由となる方軌」とある中の「否定が」は「滅は」となおして、全体を「滅は自性が無なることで、これがアーラヤ識を認めない理由となるわけ」とし、同㊱の「3必要のために説かれた譬喩を説く」とある中の「必要のために」は「密意によって」と訂正すべきであろう。

ところで、著者が用いた解読のための方法は、止むなく便宜的に用いたとことわっているにもかかわらず、「入中論」の解読にあたって必ずしも成功していない。本文も注釈によって補足しながら解読することによって、本文の理解を容易ならしめようとしたという目的からすると、かえって本文を読みづらくし、かつ理解に混乱をおこし易くしたのではないかとおそれる。たとえば、本論冒頭に出る、「入中論」第六章第一偈をとりあげてみよう。

「現前地(Abhimukhī-bhūmi)に等至せる心(samāpatti-citta)を持って、十力等の正等覚者の法(saṁbuddha-dharma)に直面(abhimukha 現前)して、〝此に縁りて(pratītya)彼が生起する(samutpadyate)〟という縁起(pratītya-samutpāda)の真実(tattva)を見るかれ菩薩は、般若波羅蜜多(prajñāpāramitā)に立場をおくが故に、能知所知を知得しないこと(anupalabdhi 不可得)を特質とする(lakṣaṇin)滅(nirodha)を得るであろう。」

この解読には、原文の意味をできるだけ正確にとらえようとする意企と苦心のあとが見られるし、還元サンスクリットが数多く挿入されているのもそのためであろう。しかし、果たしてここまで詳しく注釈の補足をしなければならなかったか疑問に思う。むしろ原文が補足文によってひきのばされてかえって表現全体が冗長となり、意味があいまいになってしまう危険性すら見られる。右の訳文に対して筆者の試訳を挙げてみよう。

「現前(地)において等至の心(samāhitacitta)に定まり、正等覚者の法に対する知が現前して、此縁性(＝縁起)の真実を見るかれ(菩薩)は、般若(の知恵)に定まるから、滅(nirodha)を得るであろう。」

この訳文においても、多少の語句を補足しているが、補足のことばはできるだけ少なくして本文を読み易くするようにしている。また還元サンスクリットも最少限にとどめている。このよ

うに筆者は訳文はできるだけ簡潔であるのがよいと考える。しかし著者には著者の考え方があって、テクスト本文の原意に近づくために、出来るだけ詳しく注釈を用い、多少の読みづらさを犠牲にしても、原意を説明的に補足していくべきだという意見かも知れない。しかし余分な補足や説明は、少なくとも本文理解にはかえって無益であって、そのために原文の意味を見失ってしまう弊害すら生じるおそれがある。したがって補足や説明は必要なものだけに限定されるべきで、そうすれば分量の問題もおのずから解消するであろう。このように注釈を取捨選択すれば、本文を中心としてあげ、それに注釈と研究を並記することもできたであろう。

チベット訳テクストの解読についてとくに注意しなければならないのは、サンスクリット原典はどうであったかという点につねに心を配り、解読に努めることである。この点「入中論」の場合は先述のとおり「中論疏」の存在が大きな意味をもってくる。また「中論疏」は「入中論」より後に書かれたもので、「中論疏」を著わすにあたって、「入中論」がつねに参照されていたらしい。「詳しくは入中論を見るべし」という文が再三「中論疏」に出てくることがその何よりの証拠である。たとえば、本論二三頁（刊本テクスト七五頁一～二行目）にある「……空性を不顛倒に見るための眼薬が、無明の眼病となっている盲膜を除去するために塗られて……」という文は、中論疏（刊本三七三頁五行目）の(avidyā-)timira(paṭala-)upaghātyavi-paritaśūnyatādarśanāñjanāñjita- という文とよく一致する。従って、この箇所のチベット文は「無明という眼病の膜をうち破り、空性を誤りなく見ること（を可能）にする眼薬が塗られて……」と訳すことができよう。

解読にあたって、とくに内容が難解なだけに、訳文はできるかぎり読み易いものが好ましい。一つ一つ原文と照合しながら読み返してみなければ意味がはっきりしないような訳文はできるだけ避けるべきであろう。著者はこの点にも十分に留意されたことと思うが、筆者の率直な意見を述べさせていただくと、全体的になお検討して読み易くしていかねばならないと考えられるところをところどころ見かける。また原文解釈について著者と見解を異にする点もある。さらにテクストの校訂を見のがしたところや、誤読、脱落なども見られる。いまは紙数の都合上、一々それらを列挙して筆者の意見をのべることができないので、他日を期したい。

筆者は、「入中論」の解読にあたって著者が払われた不撓の努力と学的熱情に深い敬意を捧げるものである。この解読研究が入中論研究を大きく前進せしめたことは論をまたない。とくにきわめて読解の困難なツォンカパの注釈にとりくみ、その成果を収めていることは、本書の大きな特徴であって、学界に貴重な功績を残こすものである。しかし、著者は紙数の関係からその成果のすべてを載せていない。将来、これだけを独立の研究としてまとめ、発表されることを期待したいと思う。

（昭和五十一年十二月、文栄堂、B5版四三二頁、一八、〇〇〇円）